

十、宋代③・元代

一、南宋儒教の展開

「一」、「」

朱熹の友人。湖南長沙を中心に南宋初期における道学の有力グループ、湖南学派を形成。

〔²〕を主宰。

「察識端倪説」：世界を動的にとらえ、修養法として、心が外物と接触して動く端倪を省察する。

「一二」、「」

朱熹とともに、〔⁴〕を編纂。

〔⁵〕（朱熹と陸九淵の面会）を実現させる。

「一二三」、「」

朱熹の最大のライバル。活きてはたらく心を重視し、みずからの主体性を信賴。

「心は只だ是れ一個の心なり。某の心は吾が友の心なり。上にしては千百載の聖賢の心なり。下にしては千百載、復た一聖賢有るも、其の心は亦た只だ此の如きのみ。心の体は甚だ大なり。若し能く私の心を尽くせば、便ち天と同じ。」

程顥の〔⁷〕の思想を受け継ぐ。

形而上・形而下の区別や、天理と人欲の峻別を認めない。↓心を理性と感情にわけない。

◎〔⁸〕——〔⁹〕↑↓「性即理」

心のはたらきが理をそなえている。心は一つ。

「天地の我に与えし所以の者は、即ち此の心なり。人皆な是の心有り、心皆な是の理を具う。心は即ち理なり。」

：「この心こそが真実だ」という意味で、「理」の意味が朱熹とは違う。

（朱熹にとって理とは抽象的な原理法則。）

・朱熹との論争

陸九淵↓朱熹：「支離」（内と外がバラバラ。外界と心がつながっていない）

朱熹↓陸九淵：「顛狂」（着実な学問修養を欠く勝手気ままなデタラメ）

・分析よりも直感を、冷静さよりも情熱を、観察よりも共感を重んじた。

後世、陸九淵の思想は衰えるが、明代の〔¹⁰〕

（王陽明）によって再び脚光を浴び、

〔¹¹〕の潮流を作る。

「一四」、「」

貨幣経済の発展にともなって実効を重視する学派。陳亮、陳傅良、葉適ら。

実利・実績をあげることこそが徳であり、また理である。

朱子学とは違う見方で、事物を離れて理が実在することを認めなかった。

王安石が行った国家による経済統制を批判し、民間の富商を擁護する立場をとる。

中国の伝統的な「重農輕商」とは違う思想の持ち主として異彩を放つ。

「一五、考証学の誕生

・朱熹の死後、その学術思想は急速に普及、一大学派を形成。

朱熹の著作が次々と出版、各地の門人が朱子学を広める。

↓朱子学の正当性が国家によって正式に認められる。

・〔¹³〕：朱熹の格物致知説に賛同。『黄氏日抄』。

〔¹⁴〕：諸家のうちで朱熹に最大の敬意を払う。『困学紀聞』『玉海』。

文献考証学は南宋に胚胎し、のちの〔¹⁵〕へと受け継がれる。

二、元代の儒学

- ・元：非漢民族の建てた征服王朝。チンギス・ハンが建国したモンゴル帝国は、第五代皇帝フビライの時、国号を「元」に改める。様々な人種・社会・宗教・文化を内に含む大帝国。
- ・中国化政策：知識人の保護、中国の行政官僚制度の取り入れ、科举制度の中断と再開。
- ・文教政策：朱子学の普及↓〔¹⁶〕、学校教育制度の整備。

〔¹⁷〕の編纂：中国天文学を集大成。（朱子学は天文学の分野で指導的立場にあった）

◎「元の二大儒」：〔¹⁸〕

二一、〔¹⁹〕

- ・朱子学の研究に専念。

- ・元朝への出仕。〔²⁰〕

〔²⁰〕を開き、モンゴル王族の子弟に朱子学を施す。

- ・文教政策は、許衡の提言にもとづくもの。授時暦の編纂事業に朱子学者集団の指導者として参加。
- ・教え導く対象を漢民族に限定せず、非漢民族をも巻き込み、中国文化を模索。

↓モンゴル人第一主義に抵抗し、漢民族文化の復興を唱えた〔²¹〕
〔²¹〕（遼の王族の血を引く契丹族）の政策と対比されることが多い。

- ・科举の再開：朱子学に依拠、文化人的素養より、実務能力を求める。

- ・学問的特色：朱子学の範疇を出ない（敬虔な朱子学者）、著作も少ない。

朱熹の理論体系を完備したものとしてとらえ、〔²²〕

〔²²〕を重視。

「正心」『大学』を重要な概念の一つとみなし、民族の壁を越えて諸民族を一つにまとめていく前提として、「心」に備わる先天的な良知良能を主張、「心」と天地は同じだと考える。

↓朱子学の理念は、非漢民族の間にも広く浸透。

「尊徳性」『中庸』を重視し、理論追究よりも道德実践に重視を置く。

二二、〔²³〕

- ・朱子学とともに、〔²⁴〕
〔²⁴〕（心学）への理解を深める。

- ・元朝へ出仕するが、たびたび帰郷。人生の大半を郷里で過ごし、研鑽を積み、執筆活動を行う。
- ・学問的特色：注釈作業を通じてみずからの体系的な思想を語る朱熹の手法を継承、多く注釈書を残す。

◎〔²⁵〕
〔²⁵〕

朱子学：「道問学」（読書などの後天的な学問に依拠）を重視。

陸学：「尊徳性」（人に先天的に備わる徳性を養う）を重視。

↓道学の二本柱（朱熹は議論のために「道問学」を強調しただけで、いずれも重視）

〔²⁶〕（儒学）のあるべき姿を追究。

- ・宋末元初の朱子学派

訓詁分析派：朱子学の理論を精密な注釈を通して論証。「道問学」を重視。

実践躬行派：朱熹による堅固な理論の構築、あとは実践に向かうべき。「尊徳性」を重視。

呉澄は、「尊徳性道問学斎論」にて、「尊徳性」の重要性を強調、「道問学」に偏向した朱子学末流に位置する俗学を、現実離れた空虚な学問と批判。

- ・後世の評価

両者は、〔²⁷〕に祭られる。（正当な儒学の後継者として認められる。）

- ・相違点

許衡：誠実さを指針に人々を感化。著作はわずか。文章は質朴で明快さを第一とする。

呉澄：著作活動に主眼を置いて教えを説く。膨大な著作。典雅で華やかな文体。

- ・共通点

〔²⁸〕を重視し、〔²⁹〕の重要性を強調。

〔³⁰〕に対して否定的。

- ・許衡によって朱子学は隆盛をほこり、呉澄は「道問学」に流れた朱子学末流に対して「尊徳性」の重要性を強調し、朱子学の本来あるべき姿を回復させた。